〔質疑応答〕

○司会　どうもありがとうございました。

時間が一応来てしまったのですが、少し質問とか御意見とかございましたら出していただきたいと思います。

○質問　ＵＮＥＰの活動についていろいろ御説明があったのですけれども、やはり今伺っておりますと環境面からの問題へのアプローチというのが非常に中心になっておるような感じでございますが、先般私ちょっとＯＥＣＤのＤＡＣの経済開発と環境問題に関するセミナーがございまして出席いたしましたのですが、やはりそういった場所で環境問題が入ってまいりますと、どうしても環境に中心を置いた議論に非常になってしまうのです。ところが実際参加したＬＤＣ諸国もあったのですが、議場外で話を聞きますと、実はやはり自分の国では若干の環境の犠牲があっても経済開発を優先しなくてはならないのが実情だというふうなことを言ってくるわけなのです。そういった状況にかんがみますと、やはりこれからは、改めて申し上げるまでもないのですが、環境アズ・サッチとしての議論だけではなくて、常にＬＤＣ等の経済開発とのバランスを図った物の見方とか議論をしていく必要性があるのではないかという感じを非常に強く持ってきたわけでございますけれども、そういったマルチの場での活動、ＯＥＣＤでの活動等にＵＮＥＰ等として参加される場合あるいは教育される場合、どういう視点から協力していらっしゃるのでしょうか。

○綺村　それは最初から非常にはっきりしておりまして、つまりエンバーラメンタリー・サウンド・デベロップメントという言い方をしております。これは例えばデベロップメント・プロジェクトが従来エンバーラメンタル・コンシダレーションをとらなかったために、実際にデベロップメントになっていない例というのがたくさんあるわけです。それをやらないように、エンバーラメントの問題を考えつつデベロップメントを進めていくという、むしろプライオリティはデベロップメントに置いているといっていいわけです。ＤＡＣの議長のジ

ョー・ウィラーというのは、これは私どものＵＮＥＰのもとの次長です。なぜウィラーのような人をＵＮＥＰの次長に持ってきていたのかといいますと、そういった観点を常にトップ・マネージメントの中で持っていてもらいたいということからやっておったわけで、開発を通じて環境を改善していく以外に環境改善の方法はないのではないかというのが我々の考え方です。だからエンバーラメンタリー・サウンド・デベロップメントという言い方が、エンバーラメントということがあるためにまだアレルギーを感じるとするならば、サスティナブル・デベロップメントという言い方にしてもいい。これは持続的開発といっておりますが。

それは非常に難しい問題だなと思いますのは、例えばバイラテラル・ベーシスでやられた巨大事業の１つとしてアスワンハイダムの問題があります。御承知のようにアスワンハイダムは水のたまりが悪いとかいろんなことがあったのですが、一番極端なのは水路を通じて充血吸虫が蔓延して、そのために大量の医療費を投ぜざるを得なくなった。ナイル川の流量が減ったために内水面漁業が壊滅した。ナイル川が氾濫を繰り返すことによって農業生産が上がっていたのがうまくいかなくなったとか、ナイルの河口でのイワシの漁が激減したとか、いろんなことが言われているのです。それはマイナス面として言われていたわけです。私は水のことを多少調べてきたのですけれども、水というのは大変なもので、蒸発によって失われる量というのが物すごく多いのです。ああいうナセル湖なんかのような表面積の大きいところになりますと、これは相当の蒸発量がある。あれは水が漏れているのではなくて、僕は蒸発ではないかと思います。ソ連のリーポビッチという人が計算したあれでいきますと、表層水位の水収支ですが、計算の結果降水量が１０８．４とします。これが入です。支出の方は、蒸発によって７１．１、表層水が３７．３。つまり７割蒸発するわけです。それで循環しているわけです。そういう問題がある。

今アスワンハイダムのことを言い始めておったのは、これがエコロジカル・ディザスターだというふうに言われておったわけです。メリットよりもむしろコスト・ベネフィットで見てみるとデメリットの方が大きいのではないか。ところが過去１９８０年代に入って大干ばつがありました。エジプトはびくとも影響を受けてないわけです。アスワンハイダムがなかったら我々も同じ目に遭っていたといいます。だから、それはやはりなかなか難しい問題だろうと思います。したがってアスワンハイダムはジャスティファイできたのではないでしょうか。ジャスティファイできたけれども、もう少しコスト・ベネフィットを考えてエンバーラメンタリー・サウンド・デベロップメントをやっておられれば、これはソ連とナセルとの間の何でやったわけですからナセル湖ともいいますが、どこの国も口出しをできる状態ではなかったのです。いろいろ言われておったけれども、せいぜい文化遺産をちょっとよそへ持っていったこと。その水没すると言われていた文化遺産が、アスワンに最近行ったＮＨＫ学園の先生によると、全部ちゃんと出ているので動かすこともなかったのだなという話なのですが、ですからエンバーラメンタリー・サウンド・デベロップメントを考えてやれば、ああいったマクロ・エンジニアリングも僕は捨てたものではなかったのだなと。１００年に１回ぐらいの大飢饉が救えたというところはあります。したがって、そういうことについては割合フェアーな評価を私どもはしております。

○質問　今のことに関連しての話なのですけれども、私自身開発計画をやっていまして、以前ＷＨＯでやはり環境衛生の分野で働いていたのですが、確かに開発と環境保全というものは非常にポジティブに連絡していくべきなのですけれども、やはり開発途上国の、一次産品とか、そういう国であるところまでは国際協力とかそういうのでコストということを考えるわけでしょう。今のベネフィック・コストの話になるわけですけれども、そうすると国のこういう環境

基準というものが国によって違ってよいものかという話が１点。もう一つは、やはり今おっしゃったアスワンダムの話にしろ何にしろ、実際にディシジョン・レーティングするときには非常にわからないことが多いのが現実だと思うのです。しかし何か決めなくてはいけないといった場合に、どうしても環境問題というのは政治的な決着になる可能性が非常に多いと思います。ある科学の枠の中でわからないから、そうすると反対するにしろ賛成するにしろ科学的なデータをある程度持ってきてやるという必要があるわけです。そうなると、やはり政治プロセスというものを１つの環境問題の中にとらえなくてはいけない。そうなると、私自身プランナーですけれども、例えばプランナーとしてやった場合に弱い味方について政治的なある程度の平衡をもたらすというやり方と、あくまでも客観的に第三者に立ってその政治的なプロセスに加わらないというやり方があるのですけれども、恐らく環境問題も同じように弱いところで、例えば開発だけ押してくる人間に対抗して政治的な１つの、例えばドイツの緑の党とか、ああいうふうに政治的にワーッと政治的にのっかってきて今やっていますけれども、ああいうふうなやり方にＵＮＥＰ自身がどういうお考えに組織自体がなっているかということを……。

○崎村　それは、やはり科学的知見を第１にするということです。第２は、ディシジョン・メーキングのプロセスで幾つかの、つまり今おっしゃった言い方は開発側の人間はもう開発だけしか考えていないというあれですけれども、実際には働きかけ方によって開発の人にこういう問題があるのだよ、君たちが開発した場合にこういうソシアル・コストが出てきたらこの開発のデメリットはどうなるかということで、絶えざるインターアクションによって影響をやりながら、ある時点では決断しなくてはいけないでしょう。

僕は非常に苦い経験があるのですけれども、これは私がＵＮＥＰに入る前だったのですが、パプア・ニューギニアというところで、御存じの方もあるかも

しれませんがプラリー川というところにダムをつくる計画がありまして、それを日本工営という会社がまず手をつけてやったわけです。まず一応全体的な構想はできたわけです。そこにＵＮＥＰのクリスチャン・デラィエというカナダ人の生態学者が出かけていって、政府に対するアドバイザーが欲しいというのでなっていた。これにはエンバーラメンタル・インパクト・アセスメントはぜひ必要だということで、その友達のカリフォルニア大学のディヴィス校にある某教授を紹介した。その某教授が予算の見積もりを持ってきた。その予算の見積もりが何と２００万ドルを超している。環境アセスメントにです。その当時円は３００円ぐらいしていたでしょう。１９７５～１９７６年ごろです。

それでパプア・ニューギニアの首相は飛び上がって驚いて、ブル・シット、こんな金はどこからも都合できないと。しかし、ただブル・シットだというわけにもいかないので、たまたま私はそのときにほかの用件で行っておったのですけれども、それを渡されて、環境コンサルタント会社をやっていたわけですから、持ってかえって検討してくれと言われてそれを持ってかえりまして、同じくアメリカ人の連中とギリギリ、コストを詰めていったら２５万ドルぐらいでできるわけです。それを２００万ドルみたいなものをふっかけている。やり方にもよるのですけれども。うちの会社はそれをやるつもりはない。しかし地域的に近いオーストラリアあたりの人間を使ってやればできるということを言ったのですが、もうその時点ではプラリー川に対する情熱は政府部内でスーッと冷えてしまっていまして、首相だけはそう言っていましたけれども、たまたま私の会社の日本側のパートナーが日本工営だったものですから、日本工営と日本水道コンサルタントというこの２つの会社が私どもの会社のパートナーだったものですからお話しして、やはり環境というものは開発プロジェクトを殺すものだな、ＵＮＥＰというところは随分ひどいことをしているところだなとそのころは思っておったわけです。ＵＮＥＰに行くとは思わなかったものです

から。

そういうことはやはりかなり起こると思います。だから、デシジョン・メーキングの際にエンバーラメンタル・インパクト・アセスメントはやはりいろいろな形でする必要があると思うのです。それもおざなりのものではなくて。これはかなりリーズナブルな値段でできるはずです。ですからやっていって、そしてやはりある時点では決断しないといけない。決断したときには、わからない部分で起こりそうな部分というのは、やはり決断した時点でも起こるかもしれないがわからない部分というのが既にその時点でわかっているわけです。その辺は注意深くモニターしながら仕事を進めていくということではないかと思います。

これもまた個人的な経験になりますけれども、オイルショック後、それまで環境問題が主になって凍結されておりましたトランス・アラスカ・パイプラインというのがあります。これは北極に面したプルードベイというところからアラスカの海岸まで持ってきているわけですが、それの建設にゴーを出したのがニクソンだったわけです。そのときにはもう環境アセスメントはやらなかったのです。やらないで、緊急だからというので大統領命令でやる。そのときにいろんな環境団体がいろんなことを言っておった。そういった言い分は一応全部頭に入れて、アメリカの場合はあの場合は内務省だったのですが、内務省が環境調査の会社を雇いましてズーッと建設のモニタリングをさせたわけです。最初のうちは、アメリカの土建会社というのは大変荒っぽいもので、ダイナマイトをダーッと埋めていってバーンとやるわけです。それで一遍に溝ができてしまうわけです。もう野生の動物なんかにとっては大変なことになるわけです。そういう工法はさすがにやめさせて、そういうふうなところから始まってモニタリングをやっていきまして、その間に永久凍土が油の熱で溶ける、それを防止するためにグラスファイバーでパイプラインを囲むとかいろんなことがあり

ましたけれども、結局でき上がって、でき上がった結果、建設中のモニタリングの結果もよかったのですが、今やはりほとんど環境問題が起こっていません。それはアメリカにとっては大変貴重なエネルギー源になっていると思います。だから、ある程度の環境の影響が考えられた場合には、開発の過程でもモニタリングを通じて方向をちょっと変えていくということは僕はできるのではないかと思います。だから、白か黒かという議論にはならないと思います。

私どもの態度というのは、やはり今言ったようにリーズナブルな形でエンバーラメンタリー・サウンド・デベロップメントをやっていくということだということです。だから、常に開発側の方との対話は非常にあります。ＵＮＤＰとか世銀とかＵＳＡＩＤとかスウェーデンのＣＩＤＡとかカナダのＣＩＤＡとか、非常に対話はよくやっております。また、謙虚にいろんなことを聞いてきます。ただアフリカの場合には、やはり最近の日本の農業基盤整備プログラムというのはヒットだったのではないかという感じがします。今ケニアでナーサリーをやったりいろいろされて、コミュニティ・フォレストをつくって実験的にいろいろやっておられますが、あれはいろんな国がそれに似たようなものをいろんなところで始めるのではないかと思います。そういった意味で、１つの道をつけた感じです。

○司会　どうもありがとうございました。話が非常におもしろくなったところでちょっと残念なのですけれども、またの機会をお願いいたしたいと思います。

どうも長時間ありがとうございました。